慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十二年六月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

（通第九十九号）

第九卷　第六號

目次

可説居士法信抄……花田正夫…(1)
大経五悪段講話……福島政雄…(6)
世相を顧みて……和才誠司…(12)

可説居士法信抄

花田正夫

私註。可説居士とは、去る四月二十六日、二十九歳の身をもつて、死刑に処せられた某君の法名であります。本年四月に入学した女の子と、三年生になつた男の子もあり、家で奥さんが立派に育てて居られます。

昭和三十年四月一日に、N拘置所から可説君の親書を貰いました。丁度当日は私の亡父三十三回の忌日であり私は御縁の不思議さに驚き、早速面接したのが信交の始めでありました。爾来二ケ年、毎月二三通の法信を受けました。可説君が処刑されたと知らされて、大切に保存しておきました書信を、年月順にならべ最後の君の徳音として読み終り、君の心中に薫じてやまぬ香烟をここに抄出して、謹んで載せました。

三〇、三、三〇日発信。

南無阿弥陀仏

突然御免下さい。恥しい事でありますが、私は今拘置所に拘留中の者ですが、当所指導課長、橘先生に親しくお導きを賜り、又慈光誌を毎月拝読し、先生と共に心ゆくまで味つて居り、月々の着本を待ち遠しく思つて居ました。

然し昨年九月橘先生が松江に転任せられてから拝読することが出来ず、残念で〳〵どうしても忘れることが出来ず、御迷惑ながら御送本お願ひ致します。

私は今年の一月十六日に、信道会館の福田先生の御指導と恩恵により剃髪式をすませて頂き、法名、釈可説、と頂きました。

私如き一切の悪業を具し、五逆十悪の罪人をお救ひ下さる南無阿弥陀仏の御本願を頂き、生かされる喜びを感謝し報恩の余生を送れる私は只々幸せ者であります。

三〇、四、二日発信。

昨日は思ひもかけぬ御縁を頂き、一時は、今日は四月一日なので、常々先生にお逢ひ致したいと申して居たので、今日は馬鹿にされるのかなと疑つた程でした。然し目前に先生の御姿を拝し、御教誨を頂けるのだと思ふと嬉しくて嬉しくてたまりませんでした。先生と御縁を頂いてこんなに嬉しいのだから久遠のみ親様にお逢ひ出来たらどんなで

あらうと一入念仏を喜ばせて頂きました。

人間と生れ、又罪を縁として、罪の償ひの屋根の下に置く身であつても、仏の教を聞き、久遠のみ親の呼び声の聞ける私は何と幸せ者でせうか……。

昨夜は夜通し頂きました慈光誌やら、福島先生著『こころ』を拝読いたしました。ことに福島先生の御本の中の、学問と信仰のところを嬉しく有り難く、繰り返し拝読いたしました。福島先生に呉々もよろしく御礼を申し上げて下さい。……。

三〇、四、一〇日発信。

南無阿弥陀仏。……四月八日の花祭の良き日に、私如き罪人の我儘を聞いて下さつて、福島先生が御来所下さり、直々の御教誨を頂き有り難う御座いました……。

三〇、五、二四日発信。

……去る二十一日、故郷の栃木より母と兄が面会に来てくれました。三年余り逢はなかつた母と兄に面会し、母も兄も私の元気な姿を見て喜び、私も嬉しくてねむれぬ程でした……。

慈光誌五月号の特に福島先生の願成就文、ことに抑止門の御法味、身にしみて頂きました。広大なる大慈の御手をしみじみと感じました。

それに遠方より親が面会に来て下さつた際だけに、親の子を思ふ心、この、罪を犯し、親を泣かせ、苦しめた子を忘れられずに逢ひに来て下さる親の心、私の如き愚かな者でも、ずぶとい者でも『すみません』と申さずに居られません。案じ、念じ、心配して下さるみ親の大悲こそこの抑止門ではないでせうか、有り難いことです。

無義為義の念仏の榊原先生のお喜びも頒けて頂き、只今歎異抄を拝読中なので大変よく領解させて頂きました。重ねて御礼を申します。……。

先生には失礼ながら一度来所して頂き、池山先生の御話を聞かせて頂きたいと思つて居ります。何卒お聞きとどけ下さい……。

三〇、六、一〇日受信。

昭和三十年六月九日は忘れられぬ私には尊い意義のある日として心に刻まれました。お忙しい中を御来所下さり、池山先生の色紙『オネガヒダカラスグキテオクレヨ』を頂き、又『仏と人』も有り難う御座いました。

そして、父親でなくしては言ひ得ない、法慢心へのきびしい御教誨、私のためにそれ程までにと思ふと、今日までの私の行為が如何に虚仮不実の毎日であつたかをしみ〳〵知られました。

かうした境遇に置かれながらも、仏法を聞けば聞いたで身の飾りとし、否仏法を玩具として居りました。誹謗正法

の大罪人であることを知らせて頂きました……。帰房しまして仏前に坐し、念仏に心洗はれるばかりでありました。よき鏡を頂きました……。

三〇、六、一五日発信。

南無阿弥陀仏

重ねて深厚なる御手紙を頂き嬉しくただ〳〵合掌せずには居られません。

『この山上に修行者あり』と立看板をかけて居た私、面目次第もありません。耳四郎同行に特に法然上人が御教化下さつた『本当の盗人は、盗人と思はれぬやうに注意する、真の仏法者もまたかくの如し』の金言、いよ〳〵我身のみにくさに驚くばかりであります、高慢、我慢、邪見の数々です。

池山先生の『仏と人』を今拝読して居ります。……『ただ念仏して』に専注された先生の御一生に見ほれるばかりであります。書中の「一里塚」の「大いなる受入れ」は特に私を震はさせずにはおきませんでした。外の章にしても、私の表面だけの喜びや安心でなく、心の底から自然に南無阿弥陀仏と喜ばれ頂かれた先生の信味に浴し、深い御仏縁を謝して居ります。又、「ただ念仏して」の章の中の『高士』のあの文を読んで私がまな板の上にのせられて、先生の御手によつて料理せられる思ひでした。

「彼はまだ笑をしらない」より「彼はまだ彼の行を超越してゐない」迄の句々ごとに、私は分解される思ひでした。バラ〳〵にされる思ひでした。

このやうに池山先生によつてバラ〳〵にされ、先生のお喜び「ただ念仏して」南無阿弥陀仏の大きな金剛の根を大地にしつかり植へさせて頂き、仏光に照らされて、思ひ上る心、見せかけの心、お山の大将になりたい心、よこしまな心、等々限りない心、醜い心の山谷を見せて頂きつつ、み親様の『オネガヒダカラスグキテオクレヨ』の言葉に喜び勇んで行ける人になりたいのです。

「オネガヒダカラスグキテオクレヨ」のこの「ヨ」と味ひ下された池山先生のお喜びは……私は始めは何の気なしに口誦で居りましたが、不図、この「ヨ」に感ずるものがありました。母の温みと言ふか、母の情です。母の心配です。特にと言ひたい程この「ヨ」が強く今腹底にヒタ〳〵として居ります。

「オネガヒダカラスグキテオクレヨ」今では口癖の様になつて居ります。その度に母を思ひ、それ以上に如来聖人の念力を喜ばずには居られません。

今度の御縁による御教示は、私を分解しバラ〳〵にしてそのまま「ただ念仏して」のみのりと南無阿弥陀仏の御手によつてしつかりと組み立てて下さいました。有難う御座います。

二伸。

先日維摩経のお話しを承り、その後維摩経の中に説法されてゐる維摩対尊者舎利仏、又維摩対文珠菩薩の説話を拝読致しました。

維摩と文珠の問答が続き、舎利仏が脚の疲労を感じた時居士は集る大衆すべてに椅子を取り寄せました時、上地の菩薩達は直ちに腰をかけられたが、下地の声聞以下の者は高くて椅子に腰かけられないでウロ〳〵してゐると、礼拝せよ、頭を下げよと居士が勧め、礼拝するとすぐ腰かけられた説話や、天女が天華を雨降らして道場を荘厳した時、菩薩達には花が着して落ちぬ説話なども、成程と知らされ、一体今迄自分は経典をどう読んでゐたのかと疑ひたくなる程で冷汗が流れました。……。

三〇、六、二二日発信。

南無阿弥陀仏

……。五濁悪時群生海、応信如来如実言。

先生、私はこの身のまゝですね。只このままですね。只念仏してですね。

南無阿弥陀仏ですね、只々嬉しいばかりです。

『ただ念仏して』のみ親のお育てを頂くだけですね。

私如き者を、罪深き私を、只々南無阿弥陀仏、　合掌。

三〇、七、二〇日発信。

南無阿弥陀仏。

……東京より来て以来三度の夏を迎え、この八月で満三年になります。この三年の間私の生活環境も度々変りました。本当に六道流転の相を今生に体験し、この苦患を身に強く受けて、始めて苦楽生死、種々の世界を見ることが出来ました。

死を厭ひ、生に執じ、死を怖れて、夜毎に悩みもだえて泣き叫んだあの頃、幸にもよき善知識に遇ひ、教誨を受けられる身となりてより二年余り過ぎました今日、振り返つては感慨無量であります。

刑確定後の五六ケ月の期間中に体験したあの阿修羅の如き世界にあつて、死を怖けて一時も休まる時もなく、その絶対絶命の中に居りながら、なお見栄を捨てる事が出来ず、苦悶や恐怖をそのまま打ち明すことも出来ず、死を怖れながらも口には「生きて一日一日を苦しむより一日も早く死んだが楽だ」などと言つた、あの頃の私の毎日は何の希望があつたでせうか。

今年なほその当時の狂ひ廻つた一切が深く脳裡にきざまれて、これらは今日の私の何かとさからひ、たけり勝な身心の薬となつて居ります。

三〇、九、一五日。受信。

合掌。……近々彼岸が参ります。昨年九月二十日に往相廻向された囚友の一年忌になります。御縁があつたら仏前にて礼拝致したいと思つて居ります。誠に明日知れぬ身の上なればこそ、一層お念仏を頂き御礼詣りさせて頂くばかりであまります。

三〇、九、一九日。発信。

九月号慈光、十七日に拝受いたしました。この度は柳瀬曽治先生の近角常音先生を追慕されて「お顔を見、お声を聞くだけで、患ひも悩みも消えて、共にほゝ笑みの中につつまれて言うことがなくなつて了ふ」とありますのが、私にとりましては、念仏を口ずさみにして下さり、御本願の大慈大悲の光明を、私の心の窓を明けて、さし入れて下さつた橘先生がさうした方でありました。

又、近角先生の申された一言『死にたくないね』、この御一言は、百雷を一身に受けた程の驚きでありました。なぜ私はこのすなほさになれないのだらうか、歎異抄九章をつねに口ずさみ、頂いて居りながら、この御一言に、私の不純の心を知らされました。

又、福田師から池山先生の『意訳歎異抄』を頂き、『仏と人』と、慈光誌上の御教とを併せて、繰り返して拝読して居ります。

『オネガヒダカラスグキテオクレヨ』

まことに心温る御声、折につけ、事につけ、この御声を口ずさんで居ります。

合掌

三〇、一一、三〇日。発信。

慈光有難う御座いました。……池山先生御夫妻の信仰生活、平生業成の御安心の御姿を続ませて頂き有難う御座いました。私もさうであるべき身でありながら、今日この頃はお恥かしい日暮しであります。餘りにも煩悩の御客様が多くて困りました。それでも何時しか南無阿弥陀仏は心の主となつて下さいます。

三〇、一二、一四日。発信。

……何時しか十二月となりました。明日、いや、今にも知れぬ三定死の身でありながら『もしや〳〵』の毎日、浅間しい限りであります。

本年一月号より十一月号まで心ゆくまで繰り返して拝読いたしました。……慈光は躰験と法味を飾る事なく、人を誤間かさず、自己を打ち明けて、死を死と導き、苦を苦と導き、私の如きずぶとい者に唯一の道標です……。

今年中は色々御世話になりました。新年の日の出を先生方と共に拝し、合掌して生かされる喜びを味ひ御礼を申したいと思ひます。

福島先生に御遇ひの節は呉々もよろしく御伝へ下さい。

乱筆乱文にて。

註本年五月廿五、六日の中外紙上に福田師が『愛と死の記録』の題で可説君の最後の心境と家庭の模様を照会せられました。本稿は昭和三十年に貰つた法信の抄出です。

大経五悪段講話

福島政雄

それからこの順序が種々になるのでありますけれど、第四の悪、その権力欲、威張りたいといふのであります。

これがまあ皆人間といふものは皆それは持つてゐるとは云ひますものの、私のはこの性質が悪いのでありまして、私のは如何にもおとなしさうに見えるといふのでありません。人様が御覧になつて、けれども実はこの負けん気が強いのでありまして、今までずうと学問をするのでも何でも、この負けん気でやつて来たのであります。さうでありますからして矢張り、その威張りたがるのであります。それでその威張りたがるといふのが、人様からお世辞にも種種私をおだてるといふやうなことを云つて頂くといふと、いい気になります、すぐいい気になります。これはこの私の非常な弱点でありますが、つまり私がこの威張りたい、人から持ち上げられたいといふのが大いにあるのであります。これがその丁度第四の悪といふところにあたるのでありまして、何もこの政治家のやうに表面から権力の争ひをするといふのでなくして、争ひをしないやうな顔をしながら、実は自分が威張りたい。この方が性質が悪いのであります。政治家のさわぐ方が性質がよいのでありませう。そんなことでありまして、仲々権力の欲といふものが底の方にひそんで居りまして、これが始終仇いてきて居るやうなことでありますからして、第四の悪といふのも、よそ事ではない。これは私のことである。それも私の智慧といふものが仲々足りないからであるといふことになるのであります。

これはよくうかがふことでありますが、智識と智慧とは違ふ。智識は外へ〳〵とひろがつて行く。智慧といふのは内へ〳〵と深くなつて行く、さういふ仂きが智慧である。つまり智慧といふ方から言へは、これでも自分は足りない、これでも自分は駄目である。何処までも自分の駄目なところに目が醒めて行くといふところになると、智慧といふものがその人にひらけてゐるいふことになるんでありますけれども、矢張り私は薄つぺらなところが大いにあるやうであります。

どうもソクラテスを研究して見てもさうであります。仲

仲ソクラテスのやうにはとてもなれないといふ気持がいたしましたものでありまして、その智慧の境地がひらけるといふことは大したものであります。智恵の境地がひらけるといふと、権力の欲といふものは、とかされてくる。

さうすると、この親鸞聖人のみ教といふものでは、自分で自分の智慧の境地といふものを開くといふのぢやない、仏様の智慧をたまはるのである、かう仰言つて下さるのであります。

成程自分の智慧といふものが、仲々ひらけはしないのでありまして、仏の智慧といふものに照らされて、実は自分は権力欲だらけの者であると、覇気満々の人間であるといふことを、底の底まで自分の姿といふものを知らしめられる。さうすると第四の悪といふものが私の問題として、ズーとひびいて参りますのであります。

それから第二の悪でありますが、まあ第二の悪といふものは、欺し合ひなんかが主になつてゐるやうでありますが、これはこの欺すといふのは、わざ〳〵嘘をついて人を欺すといふよりも、すこし性質の悪い欺し方があります。たとへば私の事で申せば、私がこんな所でこんなお話をして居りますといふと、あの人間は矢つ張り信仰があるらしい、仲々立派なことを言つてゐるやうだ。と皆様はお思ひになるでありませうけれども、矢張りそれはこの、うまいことを言つて、皆様を欺してゐることになるのであります。それだからこんなところでかういふことを申上げながら私は狐のやうな者でありますからして、欺されんやうに御用心願ひますと、かう言はなくつちやならぬことになるのであります。

何か仏教の方で不浄説法とよく申しますでせう。浄くない説法。それなのであります。尤も私がかういふことを申し上げる時、皆様を欺さうと思つて物を言つてゐるのぢやありません。さうではありませんけれども、結果はどうなるかと申しますと、欺したことになるといふのは、私が此所で、この大無量寿経などを問題にして、立派なことを申して居りますけれども、自分といふものが仲々さうなつてゐないといふのが本当でありますからして、そこのところは仲々さらけ出しはしませんものでありますからして、それだから実は欺すつもりはなかつたのでありますけれども私の生活全体といふ上から申して見ると、皆様を欺してゐることになると、さうなつてくると、私がこんな話をしてくると、欺すより外に仕様がないと、かういふ困つたことになりますのでありますが、実際のところはさうであります。

さうでありますからして、近角先生は仲々立派なお方でありまして

『この近角といふ人間を見てくれるな。仏様のお慈悲を

聞いてくれ』

といふことを始終仰言つてゐましたが、然し近角先生は立派なお方でありました。近角先生の口真似を致しますといふと『この福島といふ人間を御覧なさるな。私が申し上げることで、仏のお慈悲、仏の智慧ばかりは本当でありますけれども、この福島と云ふ人間は駄目なのでありますからして、福島を御覧になると云ふと、あんな奴であつたかとお思ひになるに違ひない。然しながら、そんな奴が申しますけれど、そんな奴が救はれた仏の智慧、仏の慈悲といふものは、これは決して間違ひのないものであると、私といふものがさういふ駄目なものでありながら、現に救はれて行きつつあるといふこと、それから永遠に救はれて行くといふことだけは確かに申し上げることが出来ると、さうでありますからして、それは私の申し上げることが欺しになることも沢山ありますけれど、仏のお慈悲、仏の智慧といふ点においては決して皆様を欺してはゐない、それだけはほんものであります。私は嘘ばかり』とかういふことになるのであります。

そんなら嘘ばかりぢや困るぢやないか、その仏のお慈悲を頂いたら、その嘘ばかりの人間がもうチットほんものになりさうであると、さう仰言るに違ひないのであります。私自身もほんものになりさうなものだとは、そも〳〵の始めから考へて居りますのが、二十六歳の夏から、今日に至るまで、三十何年経つてをりますが、チットモこの私は本物になつては居りません。さうでありますからして、自分が本物になつてゐないにつけ、益々『虚仮不実のわが身にて清浄の心さらに無し』と親鸞聖人の仰言つてゐることが身にひびいて参りますのでありまして『無慚無愧のこの身にてまことの心はなけれども、弥陀廻向の御名なれば、功徳は十方に満ちたまふ』といふあの御和讃の通りなのでありまして、この実際私自身といふものは、無慚無愧なものでありまして『弥陀廻向の御名なれば。功徳は十方に満ちたまふ』そこに何とも言へないものがあります。飽く迄も嘘の人間が、飽迄もまことの御慈悲といふものに触れて行く、お慈悲をこの自分の生命に注がれて行く。そこにお念仏申して行くといふことただひとつになつて参ります。それが私にとつては第二の悪の問題といふことになりますのであります。

第一の悪は、主としてお述べになつてゐるのは、今の殺し合ひであります。殺し合ひと、それぢや、ではお前は、この殺人罪を犯してゐるのか。成程、刀か何かで人を殺したことはありません。けれども私はよく腹が立ちますといふと、あの人、死んだらよい、とこんなことを思ふものであります。

私が広島に居りました頃、西先生といふ立派な方がおいでになりましたが、その西先生が、或時私に

『人を死んだらいいと思ふことがあるか』

『いや、御座います』

『それや、非常にこの罪深いことだ』

と、仰言つたのであります。成程さうであります、罪深いことであります。

またそれよりも、あいつが今度来たら、この刀で殺して了へ。これは前に申し上げたか知れませんが、三年間ばかり、或人を、あれが家に来たら、この刀で殺してやれと、その頃、朱鞘の刀が床の間にありました。これで殺してやれと思つてゐたのであります。

幸に三年の間、その人は来なかつたし、そのうち私の心もどうやら和いでゆきましたのでありますが、その後、その人に会つて、実は三年の間、あんたを殺さうと思つてゐたといふやうなことを告白したやうな訳でありますけれども、そんなこともありまして、実際には、この殺人罪を犯してゐるのであります。

御承知の通りに、大乗仏教の戒といふのは、実際盗みをしないでも、実際人を殺さんでも、あれを一寸欲しいなあ、盗んだらよからうなあ。あいつ癪にさはる奴ぢや、死んで了へ、と、そんなことを考へたらもうそこに偷盗罪、それから殺生罪といふ罪をもう犯してゐるのだ。これがこの大乗仏教の戒といふものだといふことを教へられて居ります。

さういふところから申しますと、実際この、どれだけ殺人罪を犯してゐるかも解らないといふことになるからして、第一の悪といふのが、矢張りこの他人事ぢやない、私の問題となるのであります。

さうしてこの五つの悪をずうと考へて見ますといふと、どういふことになるか、どの悪が一番罪が深いかといふ問題を考へますといふと、本当は第五の悪といふのが一番罪が深いのであります。

これは金子先生からうかがつたことでありますが、人間はどうしても食へなくなると殺し合ひまでするものだと、それから終戦後のやうにどうやら食へるといふことになると、成るべく人よりもおいしいもの、いいものを食べたいといふので、欺し合ひをして自分の方がいいものを食べようとする。それもまあ、銘々が相当なものを食べられるやうになると、どういふ欲が中心になるかといふと、男女の欲と言ふものが中心になる。けれども男女の欲といふものも銘々が相当の年頃になつて、結婚も出来て、先づ問題が無くなるといふと、今度は権力欲といふことになつて、自分が権力を握つて、人を思ふやうに追ひ使ひたいといふことになる。

その権力欲も或程度まで満足されるやうになると、今度は、第五の悪といふことになる。博奕を打つて見たい、金銭を湯水のやうに使つて見たい。我儘勝手なことをして見たい、といふことになる。それだからこの宗教の方から云へば、第五の悪といふのは、人を殺すといふのは、ひどいのであるけれども、いよ〳〵食へなくなつて、殺したといふとなると、多少情状酌量すべきものがある。

けれども、他の欲は皆満たされてゐるのに、博奕を打ちたいといふことになる。これは到底許すことが出来ないものだと、斯う云ふ風に金子先生が仰言つた。それが私の身に沁みてゐるのでありますが、そんなことから考へて参りまして、法律といふものは殺人罪なんかは重大なものであると云ふ風に取り扱ふ。賭博をやつたからと云つて死刑になることは無いけれども、殺人罪を、ことに惨酷なことをやつたとなれば、これは死刑になる。で法律といふものはどうもこの上表を見るものである。本当のところはさうでない。殺人罪なんかをやる人は存外人間としては、そんなに悪い人間ではない。ところがその他の欲は満足してゐるのに博奕をして見たいといふのは非常に罪が深いと、こんなことは、私は解りませんけれども、戦争よりずつと以前でありますけれど、矢張り、貴族、或種類の貴族の人なんかは、他の欲は皆満足されてゐる。さうなると矢張り博奕が一番面白い。そんな人になると、麻雀なら麻雀をやつても金を賭けてやる。それが非常に面白い。さうだから人間といふものは堕落すれば限りのないもので、一つの欲が満たさるれば、次の欲、次の欲、となつて、おしまひには、そこまで行く。まだまだ、どん底まで行くやうになるかも知れないといふことになりますと、さう思つて参りますと私共の前には所謂無間地獄がひらかれてあるといふことになりますのであります。無間地獄で、何処までも、何処までも落ちて行く。ここでとまるといふことがない。これはあのエレベーターに乗つて、すうとあの降り始める時のいやな感じがいたしますが、あれが永遠に続くといふのが無間地獄に落ちて行く感じだらうと思ふのでありますが、あれはこの、何とも言へないものであろうと思ひます。

ただ私共は、そんなに無間地獄などには自分は落ちないぞといふうぬぼれがありまして、今落ちながらも、落ちていないと思つてゐる。それだから平気で居るのでありますけれども、矢張り無間地獄といふことになる。さうなつて参りますといふと、今度は一つ一つの悪の終りについて居りますところの

『一心制意、端身正行』

一心に自分の意を制へて、我身を正し、正しい行をするといふことが、五遍繰り返されてありますが、その、一心制意、端身正行、といふの、は御承知の通り、親鸞聖人の御解釈では、

その一心というのは、我々の愛欲煩悩、その他の、ひどい煩悩を決して押へられるものぢやない。

その一心といふのは、仏の一心である。仏の一心がこの身に徹つて来て、さうして自分は悪いことばかりをしたくてたまらぬのが、どうやらこのとかされてくる、一心制意端身正行、といふのはさういふことであつて、自分で自分の心をおさへて、心を立派にやつて行くといふのぢやない。自分では決して立派にやつて行けるものぢやないと仰言つているのでありますが、それは如何にもさうだと思ふのであります。

私自身の経験から申しましても、自分にある欲が起つてくる時、この欲は悪い欲だ、押へつけねばならぬとおさへつけやうとするとなほその欲はひどくなるのであります。

それは食物の欲でもその他の欲でも、みんなさうなんでありまして、制へつけようと、ひどくなつて来るので、制へつけて了つたとなると、とんでもない欲がパッと出て来るといふのがこの私共の実際の有様なのでありますといふことがわからせられて参りました。

まだ青年時代には克己といふことを教へられて来て居りまして、自分に悪い心が起つて来たならば、自分で自分を打ち克たなければならぬと、かう教へられたものでありますが、実際それを自分についてやらせて貰ふと、実際はさうはいかぬといふやうなことになつて来たのであります。

ぢやからして、一心制意、端身正行、といふことが仏の一心制意であり、仏様の端身正行といふものが、私共にひびく。初めに上巻の方で、兆截永劫の御苦労といふやうなことで申しましたやうに、仏の兆截永劫の御苦労、それは善の限り、美しさの限りをつくしておいでになる。それが、私なら私の上にひびいて来るといふことが、一心制意、端身正行、といふことで、飽く迄もこの仏様の仂きである。然しこの仏様の仂きであるというて、自分とよそごとでなくして、自分を目ざしての仏様のお慈悲が心の力となつて自分にむかつてはたらいて下さるのであります。そこで遂には仏様のおはたらきによつて自分が動かされて行くといふことになり、一心制意端身正行といふことが仏様によつて私ならば私の身に味はゝれるといふことになるのであります。無力な私に無限の力がはたらくのであります。

未完

世相を顧みて

和才誠司

静かなる町の片隅に　悠々余生を送つてゐる老ひの身にも　あわたゞしき時代の濤は押し寄せ　平和の生活を許されぬ　毎日のニュースに　殺人　強盗　傷害　汚職　争議　疑獄等々　忌はしき事件が次々に起り　平穏なるべき隠遁生活が脅やかされ　時には時局を憤慨して見るが　如何とも為し得ぬのが私の現状である。

されど私自心を省るに　自己の為には如何なる手段をも敢えて辞せぬこの私　虚栄の為己むを得ず唯表面だけ抑へてゐるが　心の中では人を殺し　人を傷つけ　人を瞋り物を強奪し　或は愚痴をかこちて　飽くまで停止する所を知らぬ　私と家族との間に於てさえ米ソ関係の如き深き対立が厳存してゐる　唯家族の寛容に由りて漸く平衡が保たれてゐるが　それも縁に触れ時々破れる　相手の出方一つで　直ちに鬼にでも蛇にでもなる浅間しき私　傀儡子頸にかけたる人形箱仏出そうと　鬼を出そうと相手次第である。

今や原爆が世界の問題になつてゐるが　人類関心の大問題であるだけに　原爆が今直ちに頭上に落ちて来さうにもないが　私の瞋恚の原爆は何時でも何処にでも爆発する。ほんものの原爆より私の原爆の方が仕末が悪るい。意志の弱い　私が縁に触るれば直ちに爆発する恐るべき原爆を抱きながら　今日まで無事に過し得たことは　将に奇蹟にて今更感慨に堪へぬ。

私自身を知るには自己反省すれば明瞭であるが　如何せん私の眼が外に向ひ　私自身を静かに内観することが出来ぬ　依つて私の心を知るには　萬象悉皆師とも申すか　私の心の姿の鏡である世相を通じて見る以外に方法がない。殺人事件があつた　これは決して他人のことではない　私が其当事者であつたら人を殺しかねない私である。争議が起つた　私が其衝にあつたら労務者側か資本家側かの一方に偏して　争ひぬく私である。此頃は何と事件の多きことよ　夫れだけ私が反省せねばならぬことを痛感する。私は

斯くの如く世相を通じて　自己を反省し日々新なる手きびしき鞭撻と　大慈大悲を体験して　生き甲斐を感ずる。

現代の悩みは彼我の対立抗争にある　各国　各団体　各個人が各自己の立場を主張して已まぬから　争ひは益々はげしくなる。これが解決の為め為政者　学者　教育者等あらゆる人が人智を竭くし努力しているが　解決の見込なきのみならず　文化の進歩に伴ひ問題は益々複雑化してゐる但し抗争必ずしも悪しきにあらず　抗争あるが為に　進歩があり自粛があり改善がある　彼我双方の主張は何れも正しいが　兎角一方に偏して中道を行くことが出来ぬ。此解決は人間が欲望を捨てざる限り困難である　なぜなれば人間が欲望を捨つることは出来ぬから　争ひは永遠に解決することはあるまい　如何に努力しても　どうにもならぬ

これが動かすことの出来ぬ悲しむべき現実である。

然るに茲に青天の霹靂と云はんか　対立抗争に悩みぬいて居る私に　阿弥陀如来が『対立抗争がやまず悩んで居るのが可哀想である』の唯一言　嗚呼これが現に私が安心した仏の声である　この声この言葉を少しく具体的に申して見れば　『仏は汝に争ひをやめよと申すのでない　汝の争ひのやまぬことを仏はよく承知して居る　又仏は争うてもよいと申さぬ　よいと云はれても汝が安心せぬことを仏はよく承知して居る　そのやめたい争ひがやまずして多年悩んで居る汝の心を飽くまで察するぞ　見捨てぬぞ　同情するぞ　可哀相だ　仏は汝の真実の親であるぞ　仏にたより

仏にまかせて呉れ』と　全く善悪を離れた絶対の慈悲

私の欠点を知りつくして　しかも見捨てぬ此一言　こゝに初めて心を安んぜざるを得ぬ。何たる御慈悲の方であるか

と　且驚き且あやまり果て　覚えず知らず南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と感謝の念仏が口を衝いて出る。

親鸞聖人が『しかるに仏かねてしろしめして煩悩具足の凡夫とおほせられたることなれば他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけりとしられていよ〳〵たのもしくおぼゆるなり』と御教化下され　現に私が善悪思想の繋縛から解放され安心を得た。要するにわれ　ひと共に如来の仰せを素直に頂くより外に　人生安心解脱の道はないこれぞ真実我が親鸞聖人の御勧め下さる　他力浄土真宗の御法

絶対他力信仰の真髄である。これは理窟の問題でなく実際の体験である　此信念にて世相を見るから　日々の出来事は　悉く仏縁ならざるものなく　事件に多大の関心と興味を覚え　深き意義を感じ　感謝の念仏が出る。『憂きことの尚この上に積れかし　かぎりある身の力ためさん』の意気が湧き　老ひの身に　日々新なる希望を持ち日々新なる生活を営まして貰ふ仕合せは　真に感謝感激に堪えぬ。

在るまゝに　あらき時代を　受け行かむ
すべてを知れる　仏のゐませば

三〇、四、三〇、稿了。

悪人の感謝

我悪人たるを忘るゝ時　種々の不平や愚痴こぼれ
我悪人たるを念ずる時　種々の歓喜や感謝わく

我悪人たるを忘るゝ時　衣食住や其他に不足をとなへ
我悪人にめざむる時　自己の修養の足らざるを恥づ

我悪人たるを忘るゝ時　妻子や婢僕の不始末をかこつ
我悪人に思ひ至る時　自分の影の黒きにおののく

我悪人たるを忘るゝ時　少し位は悪くてもと思ひ
我悪人たるを思ふ時　進んで悪をなすの力くぢける

我悪人たるを忘るゝ時　名利の念はいやさかりに起り
我悪人たるを省みる時　世界の外に放り出されぬを、不思議におもふ

我悪人たるを忘るゝ時　教養も、友誼もこころゆるみ
我悪人たるを自覚する時　せめては〳〵の奮励心生ず

我悪人たるを忘るゝ時　同行信者に教へ顔をなし
我悪人たるを懺悔する時　同行同信の善知識を拝む

我悪人たるを忘るゝ時　とかく仕事に惰気を生じ
我悪人たるを念ずる時　何かせずに居れぬと思ふ

我悪人たるを忘るゝ時　如来の御苦労を他人事に思ひ
我悪人たるを思ふ時　私一人の御本願と仰ぐ

我悪人たるを忘るゝ時　如来の救済を何時かの事に考へ
我悪人たるを思ふ時　現在只今のお救ひに泣く

噫、我は実に悪人たるを知る能はざる悪人なり。如来はこれがために、永劫のお育てを加へたまひぬ。有難いかな、尊いかな、

盛岡　海野里子様、贈。

編集後記

麦秋の候となり、田植も迫り、農家の人々は、猫の手も借りたい忙しさでありましせう。然しこの忙しさの中に「あきなひをもせよ、獲、すなどりをもせよ。かかるあさましき罪業にのみ朝夕まどひぬる我等ごときいたづらものを、たすけんといふ大願のましますと聞けば……」とのみ教こそ、いよ〳〵渇仰されることであります。

私共は自分の煩悩が満足されるとそれをよいこととし、それに反することをわるいときめて居りますが、一つがそらごとなら、今一つはたわごとであります。その一切がまことあることないと知らされるについても「如来の取り給ふものを取り、如来の捨て給ふものを捨てよ」。「仏智をたのめ、如来の御はからひに信順せよ」との仰せが唯一無二のひかりであり、力であり救ひであります。

——〇——

△五悪段講話は、第四、第二、第一、第五、と順を追うて御信嘗下され、そこに「仏の一心」のましますことを教えられました。仏願の生起が、ここに淵源せられてゐるのであります。有難いことであります。

六月五日夜福島先生が御来庵下され、大経の総結文とでも申す、最終の御講話を頂きました　こんなに長年の間、大経全体について詳細な御講話を頂けましたことは、なみなみならぬ御恩であります。いづれ回を重ねて誌上に掲げさせて頂きます。東京都調布市仙川町七九四番地に御住居。

△世相を顧みて、の和才翁の原稿は、現代の私共の持つ心の全体をさらけ出して下さり、その善悪の一切を、弥陀大悲の願海に受容して頂き、そこに更生の喜びのあることを教えられました。軍人としての御生涯を終えられて、御晩年を聞法求道のひとすじにいそしんで居られます。福岡市大坪町二の四八番地にお住ひであります。

△可説居士の法信抄は、五月になつて、すでに刑の執行せられた由を知り、居士を追慕するの情やみ難く、この機に処刑の日まで居士の胸中に深く蔵された法味の一端を皆様と共に頒けて頂きたい一杯で記載させて貰いました。

聚墨生

御案内

○毎月、第一、第二、第三日曜、午后一時半、一道会館、日曜講話

○第四日曜は、六月と七月、岡崎市、大谷派別院、同朋会館で午前十時から、歎異抄講話。但し七月で満二年の続講を終了。

○第一日曜の午后六時半から、中区葵町、法善寺。歎異抄輪読会。

○廿四日午前午后、昭和区小桜町教西寺。法話会。

慈光　第九巻第六号昭和三十二年六月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十一日第三種郵便物認可

定価　一部　十七円（送共）
半年　百円（送共）
一年　二百円（送共）

名古屋市南区駈上町二ノ二八
編集・発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　本田政雄
名古屋市南区駈上町二ノ二八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番